

保護者と教育改革に向き合う実践事例

ここからは保護者に教育改革をどう伝えるか。先んじて取り組む4つの学校の実践事例をご紹介します。



校長
田中顯治先生

Report 1
横浜清陵高校
(神奈川県立)

教育改革の動向や最新データを基に 学校改編で目指す新たな方向性を校内外に発信

総合学科から 進学重視の普通科へ

神奈川県立横浜清陵高校は、今年度、県立高校改革の一環として総合学科高校から単位制普通科へと改編され、校名も新たに再出発した(2018年度まで2学科併設)。

これまで総合学科で培ってきたキャリア教育や体験的な学びは、改編後も継承していく。その一方で、同校における大学進学率上昇傾向や地域性などを踏まえ、進学対応を強化する新たな方針を打ち出している。具体的には、今後始まる大学入学共通テストを見据えた教育課程編成、卒業単位数の引き上げ、英語の民間試験の導入など、これからの大学入試に対応した指導体制の充実。さらに、主体的・対話的な手法も取り入れた授業改善を積極的にを行い、生徒の幅広い進路選択を可能にすることを目指している。

同校がこうした改編に際して力を入れていることのひとつが、背景にある教育改革の流れをしっかりと伝えるとともに、新しい学校の方向性を校内外に情報発信することだ。生徒募集のため

けではなく、在校生の保護者を含むさまざまな関係者に学校の方針や取り組みを理解してもらうことが、新体制を軌道に乗せるうえで重要という考えに基づいている。

メッセージ性の強い 新たな広報紙を発行

その柱となる取り組みが、今年度から定期発行している学校広報『清陵』だ。昨年度、改編後の学校の方向性を知ってもらうために不定期に数回発行したものが原型となり、今年度から配布対象の異なる「A版」と「B版」という2種類の学校広報紙に発展した。どちらもA4判2ページを田中顯治校長が執筆し、それぞれ月1回のペースで発行している。

従来から学校ウェブサイトやPTA広報誌はあったが、内容は写真を中心とした行事や活動の報告によって、学校の雰囲気や伝えるもの。それに対し、新たに始めた『清陵』はほぼ文章のみで、学校からそれぞれの受け手に対するメッセージが込められている。

まず、「A版」は、在校生とその保護者を主な対象としたもので、生徒を通

図1 『清陵』のテーマ例

A版(在校生と保護者対象)

- 第2号(6月)
 - 学校見学(1)～各大学の個性を見極めるための注目ポイント
- 第4号(8月)
 - 「失敗を糧に」～失敗を成功の糧にする重要性/有名短期大学募集停止の意味するもの
- 第6号(10月)
 - 「メタ認知能力って聞いたことある?」～メタ認知能力の重要性と鍛え方
- 第7号(11月)
 - 「10年後、20年後に現在の半分の仕事はなくなるのか? (1)」～AIやロボットの進化がこれから働く人たちにどう影響があるか

B版(中学生と保護者等対象)

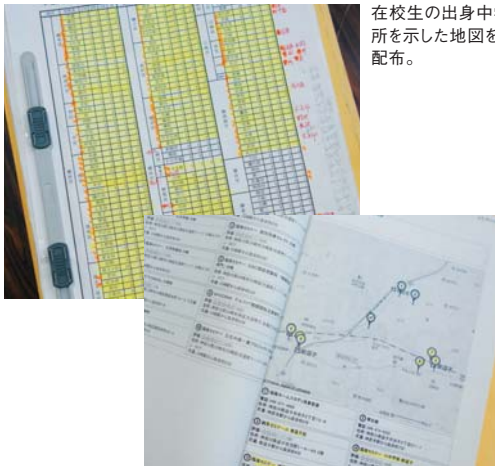
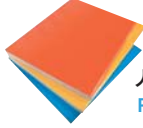
- 第2号(5月)
 - 高校選び(1)～高校選びの観点/高校選び・受験に向けて今から取り組んでおきたいこと
- 第6号(9月)
 - 高校選び(5)～志望校決定に向けた、比較検討の仕方・受験生保護者の関わり方
- 第7号(10月)
 - 高校選び(6)～「国立大学入試(英語)、20年度よりマークシート方式と民間試験が必須?」/「AO入試、推薦入試はどのように変わるのか!」

図2 授業改善通信(校内教員対象)のテーマ例

- 学校基本調査や大学生の学習・生活実態調査などの各種データを踏まえた教育改革の方向性
- 「高校生のための学びの基礎診断」導入の背景・ねらい、概要など
- 授業における「発問」の重要性とポイント、注意点
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善の必要性

学校データ

2004年創立/単位制総合学科・普通科/生徒数826人(男子316人・女子510人)/進路状況(2017年3月実績)大学134人・短大17人・専門学校74人・就職10人・その他40人



在校生の出身中学のリストや、塾の場所を示した地図を基に、『清陵』B版を配布。



総合学科時代より多くの受験生を集めている学校説明会でも、『清陵』が配布される。

保護者の声

PTA広報委員会／3年生保護者
西川美由紀さん

学校改革の状況がわかり
安心感につながっています

以前より学校からの情報発信が増えたことで、保護者の安心感は増したと感じます。最近、印象的だったのは、学校ウェブサイトにあった授業改善通信です。それにより、先生方が社会人として必要な能力育成を授業に取り入れる努力をしてくださっていると知りました。私は新入社員教育の仕事をしており、日頃からその点が気になっていたもので安心感につながりました。

また、私はこの3年間、PTA広報誌制作に携わっております。学校広報『清陵』からメッセージ性をもって情報発信する重要性を学び、今年度は内容を大きく変えてみました。以前は写真をたくさん入れた行事報告が中心でしたが、今年度は学校の良さを文章を交えて伝える特集を組むなど、これまでになかった挑戦を行っています。PTAの立場からも、各家庭に学校の動きを伝えていけたらと思っています。



じて各家庭に配布している。主に、社会や教育改革の動向、進路に関する最新データに基づいた、生徒に対する期待や進路選択のアドバイスなどが語られている(図1)。

「子どもたちが生きていくのは、保護者世代の考え方で通用しないかもしれない社会です。保護者の皆さんが、そんな現実について考えるきっかけになり、わが子に安易な進路選択をさせないための参考になったりしたら嬉しいですね」

一方の「B版」は、主に中学生とその保護者、中学校教員や塾関係者が対象だ。通学圏内の中学校や近隣の塾など150校以上にポスティングや郵送で配布するほか、学校説明会で参加者に手渡ししている。内容は、こちらでも社会や教育改革の動向と絡めながら、同校が目指す方向性を伝えている。

さらに、高校選びの観点や高校入試制度の解説など、同校志願者かどうにかかわらず幅広い中学生に役立つアドバイスもある(図1)。

「本校の良さをアピールして入学させたい、というわけではありません。一番の狙いは、本校の考え方に共感し、納得して入学してほしいということ。たった一度しかない人生ですから、不本意で入学したという後悔を引きずって高校生活を送ってほしくないのです。だから、単に普通科になるというだけでなく、どう変わるのかという考え方や方向性をしっかり示すことが重要だと考えています」(田中校長)

当初『清陵』は2種類とも印刷物の配布のみだったが、一部の号を目にした保護者から「バックナンバーも読みたい」という声が複数あり、現在は学校ウェブサイトにも掲載している。同様に、

保護者からの意見・要望が
学校改革を後押し

改編決定から1年余りで普通科一期生入学を迎えた同校は、昨年度の生徒募集にあたって、パンフレット制作が他校から数カ月遅れた。しかし、ふたを開けてみると、普通科第一期の志願者は前年度を上回る数が集まった。パンフレット完成前から、今年度の『清陵』B版と同じように、随時、広い視野

に立った情報発信を行っていた効果も大きそうだ。

そうして入学した普通科一期生は、総合学科時代の生徒とは志向性の違いが出ているという。そのことは、進学に力を入れていくという新たな方向性を理解したうえで入学した生徒の多さを物語っている。保護者の進学面への期待も大きく、学校の指導に対する意見や要望が例年より多いという。そんな状況を、「本校に興味をもってくれる証だから嬉しい」と田中校長は歓迎する。

「不十分な点があれば言っていたいただきたい。期待に応えようと我々も努力していきます。それが学校改革をより加速させていくことにつながるのではないのでしょうか」(田中校長)